

二つの特集に寄せて

小 寺 彰

本号には、2006年9月30日に開かれた二つの公開シンポジウムの記録を掲載した。アメリカ太平洋地域研究センター（CPAS）では、これまでも何度か、専門家を対象としたシンポジウム（専門家会議）と一般聴衆を対象にしたシンポジウム（公開シンポジウム）を連続して開催してきた。通常は専門家会議と公開シンポジウムは同じテーマで企画してきたが、今年度は、変則的だが文化交流に焦点を合わせた専門家会議を午前に関き、当日の午後にメンバーを変えて、安全保障、政治、経済を取り上げた公開シンポジウムを開くという変則的な形になった。

午前の専門家会議は、CPASの能登路雅子センター長が代表を務める科学研究費補助金プログラム「アジアにおけるアメリカ文化外交の展開と変容」の最終年に当たり、研究のとりまとめの一環として開催した。米国から参加されたSusan Smulyan教授（ブラウン大学）、Thomas Zeiler教授（コロラド大学）と、日本の藤田文子教授（津田塾大学）が研究報告を行い、その後能登路教授からのコメントがあり、ディスカッションに移った（参加者は約50名）。本誌には当日発表された三教授の報告と能登路教授のコメントを掲載した。

午後は、「日米関係のコンテクスト」と題して公開シンポジウムを開いた。シンポジウムでは、筆者がコーディネーターを務め、山本吉宣教授（本学名誉教授／青山学院大学）、森本敏教授（拓殖大学）、チャールズ D. レイク II 氏（在日米国商工会議所会頭）、久保文明教授（本学法学政治学研究科）からそれぞれ報告があり、韓国から招いた李元徳副教授（国民大学）と岡山裕助教授（CPAS）がコメントを行ったあと会場との質疑に移った（参加者は約200名）。本シンポジウムについては、アメリカ研究振興会から多大なご援助を頂いた。

筆者を含めて、午前中から二つの会議に出席した者も多い。二つのシンポジウムを通して、日米関係の多様な側面を見、考える良い機会であった。月並みな感想ではあるが、文化（専門家会議で取り上げられた映画・野球など）や制度（公開シンポジウムで取り上げられた安全保障や政治・経済制度など）に日米共通のものが多く、ややもすると両者の共通性に眼がいくが、そのなかに潜む異質性—たとえば、「ベースボール」と「野球」の異質性—に常に思いを致すことが大事だと感じた。本誌の読者諸氏は、二つのシンポジウムの報告をご覧になってどのような感想をおもちになるのであろうか。

最後に、同じ日に異なる二つのシンポジウムを実施するという離れ業を見事に成し遂げられたCPASスタッフに改めて御礼を申し上げたい。